

サハリン北緯 50 度国境紀行

アレクサンドロフスク・サハリンスキーにチェーホフを訪ねて

2017年8月12日～16日

写真家 斉藤マサヨシ

奇跡の出会いが待っていた

それはサハリン南部の町ドリンスク（旧落合）駅のホームでの出来事であった。

今回のツーリズムに参加したWさんは「昭和 20 年 8 月 21 日の朝、私はこのホームで豊原行きの列車を待っていたよ」と呟いた。それを横で聞いていたSさん「私も昭和 20 年の 8 月 21 日、このホームで列車を待っていました」。

二人は顔を見合わせてびっくり、すぐさま固い握手を交わした。

何と、二人は 72 年ぶりに同じ駅のホームに立ったのです。

72 年前、Wさんは小学 6 年生、知取（現在のマカロフ）から家族で樺太を引き揚げるため落合駅のホームで豊原行きの待っていたのでした。Sさんは小学 1 年生、落合から引き揚げるため、同じように待っていたのでした。お二人の話によりますと、まもなく無蓋列車が到着して落合駅を発車、同じ日の夕方、落合の町は空爆を受け、多数の死傷者がでたのであった。



ドリンスク（旧落合）駅ホームで握手するWさんとSさん

Wさんのお話では「22 日の朝、豊原駅に到着。駅前を家族で歩いていたら、空から機銃掃射があり、銃弾が雨のように降ってきたのです。身重だったお母さんが銃弾を受けて負傷、困り果てていたら、学生が来て陸軍病院まで運んでくれて、母は一命をとり止めました」。

Wさんは、母が入院していた陸軍病院が見に行くというので、私も同行することにした。陸軍病院があった場所はユジノサハリンスク市で宿泊したホテルの近くであった。今はロシア軍の病院で関係者以外は立ち入り禁止。私たちは鉄条網の外から覗くと、衛兵が鋭い視線を向けてきた。Wさん「外観は昔とまったく同じだ」。私たちは周囲を廻ってホテルに戻った。

マカロフ（旧知取）の日本人共同墓をお参り

8月13日、午前9時小雨の中、ユジノサハリンスク市のホテルを出発したバスは、サハ

リンの西海岸を北上。宮沢賢治ゆかりの地スタロドブスコエ（旧栄浜）を通過、午後 1 時過ぎマカロフ（旧知取）に到着。雨は上がり、雲の隙間には青空が見えていた。

マカロフのホテルで昼食を済ませ、石段を登り、かつての知取神社跡を訪ねた後、マカロフ在住の石川さんの案内で日本人共同墓をお参りすることになりました。お墓は知取神社跡を通り過ぎて球技場（日本時代は競馬場であった）を横断して辿り着いた森の中に、ひっそりとあった。今日は旧盆の 13 日、参加者全員（15 名）で安らかにとの願いを込めて手を合わせた。



マカロフの日本人共同墓

マカロフには、1943 年 11 月 24 日、樺太公立第一国民学校の火災で殉難した 23 名の子供たちの慰霊碑があり、献花をして参加者全員で唱歌「ふるさと」を合唱。今は異国となった地で眠る同胞に祈りを捧げ、マカロフを後にした。

生まれ故郷に立つ横綱大鵬像

午後 4 時 30 分、ポロナISK（旧敷香）に到着。ポロナISK 市内には不世出の大横綱大鵬の像が立っている。さっそく訪ねることにした。像は日本とロシアの関係者によって 2014 年 8 月 15 日、ゆかりの地に建立された。大鵬（納谷幸喜）は、ウクライナ人の父と日本人の母の三男として 1940 年 5 月にこの地で生まれた。戦後、母とともに引揚船小笠原丸で



ポロナISKの大鵬像

大泊港から小樽港に向かったが、母の体調不良により稚内港で途中下船した。稚内を出港した小笠原丸は留萌沖で魚雷攻撃を受けて沈没。多くの日本人が犠牲となった（三船殉難事件）。今、父の実家があった同じ場所に立つ大鵬像は、サハリンのロシア人にも愛されている。

先住民族戦没者慰霊碑が建つオタスの杜へ

8月14日午前9時30分、ポロナイスクのホテルセイビエルを出発した私たちは、サハリンの大河ポロナイ川の渡し船に乗った。日本時代はオタスの杜と呼ばれ、今はサチと呼ばれる先住民族が数多く暮らす場所を訪ねるためだ。

サハリンには、日本人やロシア人が進出する以前から住んでいたニブフやウイльтаなどの先住民族の人たちが多数暮らしている。

日本が統治した時代、樺太庁はオタスの杜に先住民族を半ば強制的に移住させて、日本語教育を行った。彼らは生活のため、自分たちの言葉のほか、ロシア語、日



ポロナイ川の渡し船

本語も話す必要性があった。第二次世界大戦が始まり、ソ連が中立条約を無視して北緯 50 度旧国境付近が緊張状態になると日ソ双方とも諜報活動が活発になった。現地の旧日本軍は、ロシア語が理解できて地形に詳しい先住民族の若者を徴用したのであった。諜報員として活動した彼らの多くは戦争犠牲者となった。

今、サチ（オタスの杜）には、戦争の犠牲となった先住民族を慰霊する碑が静かに立っている。



先住民族戦争犠牲者慰霊碑

北緯 50 度旧国境を訪ねる

私たちは、ポロナイスクで巨大な廃墟となっている王子製紙敷香工場跡を見てからサハリンの中央部を北上。レオニードボ（旧上敷香）で旧日本軍の師団跡、朝鮮人虐殺慰霊碑を訪ねてスミルヌイフ（旧気屯）で昼食をとった。昼食後はさらに北上、日本時代に最北の駅があったポベジノ（旧古屯）を訪ねた。1945 年終戦間近かの古屯駅周辺には旧日本軍の最前線部隊が置かれていた。北緯 50 度線を南下してきたソ連軍と激しい戦闘があった場所の一つである。ポベジノの町外れに樺太・千島戦没者慰霊碑がある。今だ数多くの兵士



権太・千島戦没者慰霊碑

が眠るこの地で、私たちは献花をして冥福を祈った。

さらに北上すると道路沿いに古ぼけたコンクリートの塊が見えてきた。旧日本軍のトーチカである。分厚いコンクリートの壁面には、砲弾の跡がいくつも残っていた。

まもなく北緯 50 度線に到着した。

道路沿いにはソ連軍戦勝記念碑が誇らしく建っている。その脇にある草が繁茂した細い荒道を 100 メートルほど進むと、旧日本の国境を標す石が置かれていたコンクリート製の台座がある。1905 年から 45 年まで北緯 50 度以南のサハリンは日本の領土であった。サハリンの北緯 50 度線約 130 キロメートルを国境と定め、天測点である 4 カ所に国境を標す石を設置した。この国境石は東から天 1 号、天 2 号、天 3 号、天 4 号と呼ばれ、南面に菊の御紋、北面はロシア皇帝の紋章である双頭の鷲が彫られていた。実物はサハリン州郷土博物館（天 1 号）と根室市博物館（天 2 号）に展示されている。

今、私たちが訪ねた国境石の台座は天 3 号のものである。1905 年ポーツマス条約により



旧日本軍のトーチカ

北緯 50 度以南は日本の領土となったが、条約の中にサハリンを非武装とする旨の条項があったため、国境警備は軍隊ではなく、警察が行っていた。このため、緩い国境で、昭和の初め頃までは国境観光が盛んで、団体ツアーも企画されるほどであった。1925 年 8 月の鉄道省が主催した樺太観光団には北原白秋も参加して国境観光を楽しんでいて、その時の旅行記「フレップ・トリップ」を著わしている。

しかし、1945 年 8 月 9 日未明、ソ連軍は北緯 50 度線を越えて南下、対峙していた日本軍と戦闘状態になり、多くの犠牲者を出すことになった。国境、いわゆるボーダーと呼ばれる場所は、時には面白く、楽しく、時には苦しく、悲しい、時代とともに移り行く場所なのかもしれない。



北緯 50 度天 3 号国境石台座

チェーホフゆかりのアレキサンドルフスク・サハリンスキー

私たちを乗せたバスは、北緯 50 度線を越えてさらに北上。サハリンの地理的中心、いわゆるヘその町ティモスコエに至った。ここから進路を変えて西に約 60 キロメートルの海岸沿いに、サハリンの古都アレキサンドルサハリンスキーの町がある。時差 2 時間のサハリンではまだ明るい午後 7 時 30 分、アレキサンドルサハリンスキーに到着した。

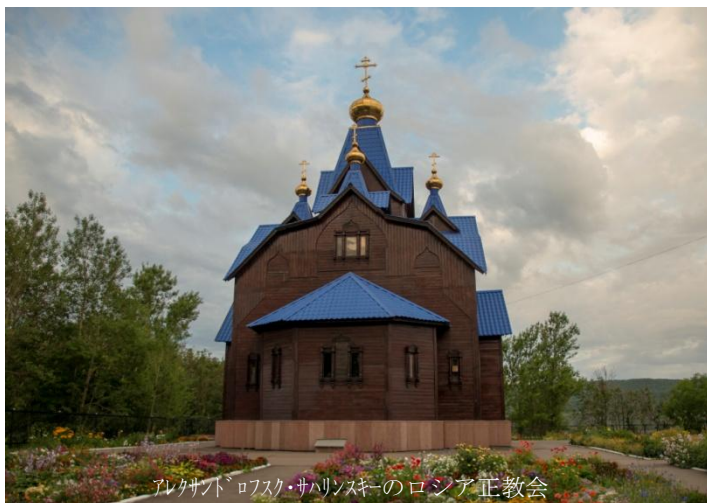
今日のホテルトゥリーブラートにチェックイン。夕食後、アレキサンドルサハリンスキーの街を散策。気温は 21~22℃ほどであろうか、清涼な空気が心地良い。間宮海峡を見下ろす高台に出た。眼下には、夕映えに光るドゥイカ川（チェーホフのサハリン島での呼び名）が美しい景観を見せてくれた。

アレキサンドロフスク・サハリンスキーは、シベリア出兵後の 1920 年から 1925 年までの 5 年間、日本軍が北サハリンを占領した際に「亜港」と呼んだ町でもある。



ドゥイカ川の夕映え

今、一緒に街を散策しているWさんは「私の母とおじいさんが、ここ亜港で魚の卸売り市場をやってましてね」「当時、亜港には日本人町があって、大勢の日本人で賑わっていたという話を母親から聞かされました」Wさんは亜港の古地図を持参していて「ロシア正教会の隣に日本軍の司令部が置かれていました。行ってみましょう」



二人で教会を探していると、今回のツーリズムで一緒のAさんとSさん若い女性二人と出会い、4人で教会を探すことにした。街の西側の丘に金色の玉ねぎ頭のロシア正教会を見つけた。木造の教会は、鮮やかコバルトブルーの屋根と金色の玉ねぎ、独特の十字架が美しい。Wさんは「この横が旧日本軍の司令部があった場所ですよ」。そこには軍の施設らし

い大きな建物があつた。

1890年夏、チャーホフは鉄道、馬車、船を乗り継いでシベリア大陸を横断。アレキサンドロフスク・サハリンスキーにサハリン旅行の第一歩を標した。当時のサハリン全島は帝政ロシアの領土で、島全体が流刑地であつた。受刑者は1万人を超え、その実態はベールに包まれていた。チャーホフは、受刑者一人ひとりの調査カードを作成して、その実態を細かく記載。後に「サハリン島」として出版したのであつた。明日はチャーホフゆかりのジョン・キエール岬、トゥリーブラート（三兄弟岩）、チャーホフ博物館を訪ねる。

チャーホフゆかりの地を巡る

8月15日午前9時、ホテルをチェックアウト。サハリンの名勝地の一つであるトゥリーブラート（三兄弟岩）を訪ねた。海岸から数百メートルほどの沖合に、三角おにぎりの形をした岩が大中小三つ並んで立っている。まさにトゥリーブラート（三兄弟岩）である。

ガイドのエレーナさんが「ジョン・キエール岬のトンネルを抜けるとトゥリーシストラ（三姉妹岩）もありますよ」と教えてくれた。

トゥリーブラート（三兄弟岩）の前で記念撮影を済ませ、ジョン・キエール岬まで海岸を歩いた。途中の崖には古い時代の化

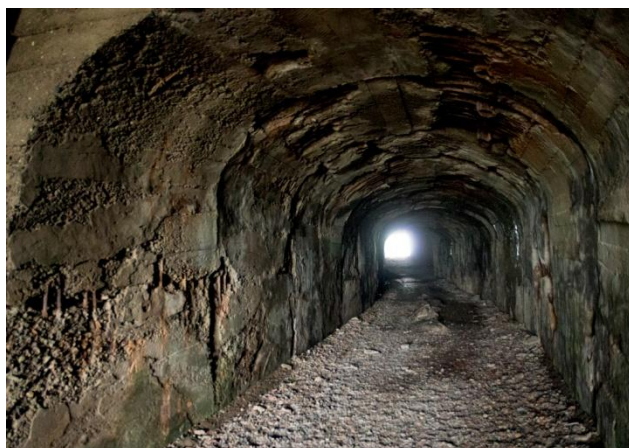


トゥリーブラート（三兄弟岩）

石層が露出している。足元には貝殻の化石のかけらがゴロゴロしていて、何人かは化石探しに夢中であった。



ジョン・キエール岬



受刑者が掘ったトンネル

ものである。

博物館の隣には、今年オープンしたばかりの駅通博物館がある。馬糞の修理やレストラン、宿、郵便の取次、簡易留置所も備えた当時の駅通を再現している。シベリア大陸、そしてサハリンを往来する苦労を偲べる貴重な展示である。



駅通博物館

まもなくジョン・キエール岬の突端に着いた。そこには高さ2メートルほどの小さなトンネルがあった。帝政ロシア時代に受刑者が労働として掘ったものである。トンネルの目的は定かではない。トンネルを抜けるとエレナさんが話していたトゥリーシストラ（三姉妹岩）があった。岩が少しいびつで、説明されないと分からない名勝地である。トゥリーブラート（三兄弟岩）を後にした私たちは、チャーホフ博物館へ向かった。

チャーホフ博物館は、1890年アレキサンドロフスク・サハリンスキーを訪れた当時、地元の裕福な人から借りて住んだ丸太造りの家を修復したものである。中には、チャーホフ自筆の手紙やチャーホフが愛用した机などが系統だてて展示されている。見ごたえのある内容でチャーホフのファンには垂涎



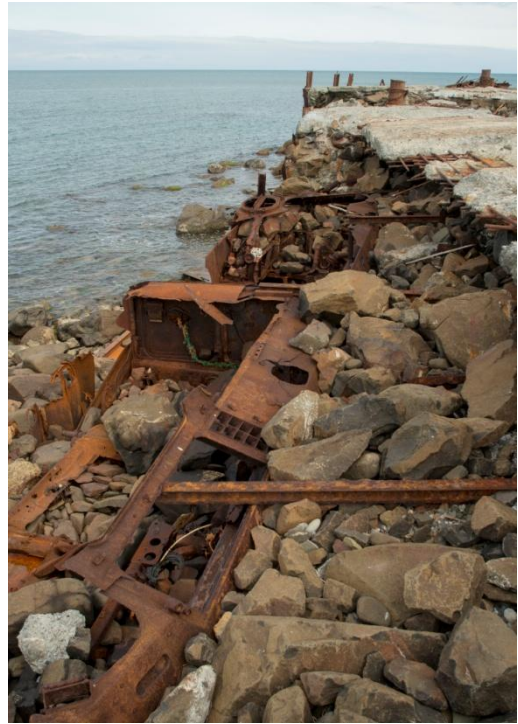
チャーホフ博物館

日本占領時代の栈橋とソ連時代の栈橋

1920年北サハリンを占領した旧日本軍は、アレキサンドロフスク・サハリンスキーに栈橋を築いて海軍の基地とした。その栈橋の一部が今も残っているというので、私と何人かで探検することになった。危険があるため、陸には高い塀が巡らせてあり、立ち入ることができない。私たちは海岸沿いの岩場をつたって栈橋を目指した。

先ず辿り着いたのはソ連時代に築かれたであろう栈橋だ。その栈橋の基礎部分は廃棄された戦車が積んで築いたものであった。波浪で崩壊した栈橋からは、鉄錆びた戦車の残骸が露出している。なんとも不気味な光景である。この栈橋をよじ登ると、そこにも戦車の残骸が放置されていた。

私たちは崩落しかかった岸壁を慎重に進んだ。廃船が放置された奥のほうに日本占領時代の栈橋があった。ソ連時代の栈橋よりもしっかりと残っていた。栈橋に立ったWさんは「母は小樽から船に乗り、一週間かけて亜港に着き、この栈橋に降りたんだ。来てよかった」と目を潤ませていた。



戦車が埋められたソ連時代の栈橋



1920年～25年の旧日本軍占領時代に築かれた栈橋

サハリン鉄道でユジノサハリンスクに戻る

私たちは、アレキサンドロフスク・サハリンスキーを後にした。途中、スターリン粛清の犠牲となったロシア人の慰霊碑を見る。午後 4 時過ぎティモスコエに着いた。午後 7 時 21 分発の列車まで時間があるので、ティモスコエの博物館を見学しようとしたが、町は突然の停電。博物館も急きょ閉館して見るができなくなり、買い物をしてゆったりと夕食を楽しんだ。

午後 7 時 10 分、ティモスコエ駅に 12 両編成の列車が入ってきた。駅のホームが低いので、列車に乗り込むのは山登りと同じくらい大変なのだ。とくに女性客はスーツケースを持ち上げるのに一苦労する。車掌は手助けなんかしてくれない。客どうしが互いに協力して乗り込むのがロシア流のようだ。

私の時計（電波時計）で午後 7 時 20 分、定刻より 1 分早く列車はティモスコエ駅を出発した。列車には座席車両と個室車両がある。4 人で 1 室の個室には 2 段ベットが二つあって、快適な鉄道旅を楽しむことができる。鉄路独特の振動音が響いていたが、旅の疲れなのか間もなく深い眠りにおちた。

翌朝の午前 6 時 30 分、列車はユジノサハリンスク駅に到着。私たちはホテルで朝食を済ませ、少し休憩した後、サハリン州郷土博物館を見学。複合商業施設シティモールで買い物をして、ユジノサハリンスク空港へ向かった。午後 4 時 35 分発のオーロラ航空の飛行機で帰路に着いた。4 泊 5 日サハリン国境紀行、アレキサンドロフスク・サハリンスキーにチェーホフを訪ねる旅は終わった。